

「三つのそれから」

開会聖句 マタイの福音書 18 章 21～22 節

「そのとき、ペテロがみもとに来て言った。『主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回赦すべきでしょうか。七回まででしょうか。』イエスは言われた。『わたしは七回までとは言いません。七回を七十倍するまでです。』」

はじめに

小説を読み終わって、ドラマを見終わって、それからあの人はどうなったのかと思うことありませんか。連続ドラマだと、明日はどうなるかというところで、話は終わります。でないと、次見てくれないからで、これは作戦です。私は聖書もそうだと思います。聖書がどうやってできたか、一方的に聞こえたものを書いたというイメージがありましたが、皆さんのイメージは昔と変わったと思います。神のことが人間の手によって書かれたということは、伝える人間側の工夫がそこにあると思います。創世記 1 章は神の天地万物の創造でしたが、2 章では人間にスポットが当てられていました。4 章は、2 章、3 章、4 章の「人間」についての 3 部構成の最後になります。2 章で神にいのちを与えられ、エデンに連れてこられ、信頼関係を持つものに造られた人間が、3 章で心の奥が露わにされ、信頼関係を損ない、エデンを追われる。そこでサヨウナラとならず、エデンの外で、それからどうなったのかというのが 4 章です。そこに登場する「三つの家族のそれから」を通して、神の恵みを新たに発見していきたいと思います。

本論

1. カインのそれからー神の恵みによって、いのちを保護された

まず、最初は「カインのそれから」。前回は振り返りますと、神はカインのささげ物には目を留めず、弟アベルのには目を留められた。それで、カインはひどく腹を立てたのでしたね。なぜ、神がそうされたのかは、色々な説がありますが、書かれてないので、実際のところはわかりません。むしろ著者の関心はそこではなく、神とカインとの長い会話(6～15)にあるからでしょう。その会話は、腹を立てたカインに、「罪が戸口で待っているが、あなたはそれを治めるだろう」という神の期待から始まりましたが、怒ったカインは彼を恋い慕う罪に身を任せて、アベルを誘い出して、殺しました。計画的な殺人。ここまでが前回でした。

今日は 9 節から。「主はカインに言われた。『あなたの弟アベルは、どこにいるのか。』カインは言った。『私は知りません。私は弟の番人なのではないでしょうか。』」カインは質問にまともに向き合わず、自分は弟の番人じゃないとしらばっくれます。今までのカインはそんな兄ではなかったはず。しかし、罪が兄弟の人間関係を破壊しました。以前、「罪ってなんですか」と質問すると、交わり(関係)の破壊だと教えられました。罪って、嘘、盗み、傷害、意地悪とかが頭に浮かぶのですが、

それらは結果的に神のかたちであるその人自身を傷つけ、相手との人間関係、神との関係をも破壊していきます。だから罪とは交わりの破壊なのです。神はすでにカインがアベルにしたことをご存じで、カインにさばきを宣告されます。10～12 節「…今や、あなたはのろわれている。そして、口を開けてあなたの手から弟の血を受けた大地から、あなたは追い出される。…大地はもはや、あなたのために作物を生じさせない。」これは農夫であるカインには致命的なことばです。父アダムへのさばきは額に汗して糧を得ることでしたが、カインは呪われ、アベルの血を受けた地はカインを受け入れない。彼はさすらい人となる。そのさばきを恐れた彼は、13～14 節「私の咎は大きすぎて、追い切れません。…」 大地の面から追い出され、神の御顔を避けてとは、神の恵みの届かないところ。そこをさまよう私は、見つかったら殺されるでしょうと恐れを伝えます。アベルへの謝罪はなく、殺人者は殺されることを恐れたのです。

神の返答はこうです。15 節「それゆえ、わたしは言う。だれであれ、カインを殺す者は 7 倍の復讐を受ける。…」これは誇張表現で、そんなことはさせない。殺人者カインのいのちをなんとしても神が守ると言うのです。アメイジング！驚きでしょう。私の考えではついていけない。古代イスラエルの律法、民数記 35:19 にも「血の復讐をする者は、自分でその殺人者を殺してもよい。彼に出くわしたときに殺してもよい。」とあります。過失の場合は逃れの町に逃げられる制度。それなのに、神はカインのいのちはわたしが絶対守ると約束され、彼を見つけた人が、だれも彼を撃ち殺すことがないように、カインの額に一つのしるしをつけられました。神は時々、守ろうとする者にしるしをつけられます。過越のときのイスラエル人の家の門柱の血。クリスチャン（神の子）である聖霊のしるし。でもカインは律法では殺されても当然の故意の殺人者。この「それゆえ」ということばは、カインを考えられない神の恵みの世界に連れていくものでした。

「カインのそれから」は、神に見捨てられることなく、神の恵みによって、そのいのちを守られたです。私はルカ 23:42 の十字架にかけられた強盗を思い出します。彼はただ、イエスに「私を思い出してください」という一言で受け入れられたように、カインが反省したのかどうかではなく、神にその恐れをそのまま話したときに、神は彼を守ると約束された。私たちが何をしたとかは関係なく、神に助けを求めるものを神は憐れんでくださるのです。

11. カインの子孫のそれから—神の恵みによって、それなりの繁栄が与えられた

2 つめの「カインの子孫のそれから」です。この後、カインは結婚するのですが、カインの嫁さんどこから来たの？と思われる方もいるでしょうが、謎です。地をさまよう者となった彼はノデに定着し、結婚し、町をつくり、その町に子どもの名エノクとつけます。彼はそれなりの幸せを得たようです。アベルの人生を奪ったカインがそれなりに人並みな人生を全うし、エノクに、イラデ、メフヤエル、メトシャエル、レメクと、その 3 人の息子の 7 代までが記されています。「それなりに」と言いましたが、「それなり」には意味があります。カインの家系にはある特徴があります。レメクの 3 人の息子の職業は、家畜を飼うもの。—ここは町ですから、牧畜というより、運搬とい

う商売ではなかったかと思われます。豎琴と笛を奏でるのは音楽家—芸術が生まれた。青銅と鉄を扱うのは鍛冶や—技術開発が進んだ。この町は人間の文明発祥の地と言われています。

カインという名前は「得た」「作り出す」という意味があります。力強い名前。その子孫もエネルギーギッシュな一族であったのでしょうか。そんな人間のエネルギーから人間の文明が生まれました。それが、神に喜ばれるものであったかどうかは、次のことから推測されます。19 節「レメクは二人の妻を迎えた。」今までになかったことです。そして、23～24 節のレメクのことばを要約しますと、彼は自分が受けた傷のために、一人の男(子ども)を殺すと言うのです。「カインに 7 倍の復讐があるなら」という恵みのことばを使っていることから、これはカインの子孫に語り継がれていたのでは。しかし、その記憶も薄れ、6 代目のレメクは殺人でなく傷害であっても、自分で 77 倍返しをすると言う高ぶったことを言った人です。神に頼らず、自分で自分を守る。町がいくら繁栄しても、神を無視し自己主張の延長にある文明は、人を本当に幸せにするかは疑問です。だから、「カインの子孫のそれから」は、それなりの幸せ、神の願いとは違った見せかけうわべの幸せと言えるかもしれません。でも、子孫は絶えることなく増えたのですから、神の恵みによって、それなりの繁栄が与えられたと言っていいでしょう。

III. セツの家族のそれから—神の恵みによって、主の名を呼びことを始めた

3 つめはアダムの新しい家族「セツの子孫のそれから」です。エバは「神がアベルの代わりに別の子孫を授けてくださいました。」と言いました。アベル、カインとは違う別の子孫、セツの誕生です。セツの子はエノシュ。26 節「…そのころ、人々は主の名を呼びことを始めた。」「主の名を呼び」ということばは、次にアブラハムが生まれ故郷を離れ、神の示されるカナン之地に入って、2 つめの祭壇を築いた場面にでてきます。創世記 12:8「彼はそこに主のために祭壇を築き、主の御名を呼び求めた。」その次は 30 年以上経って 21:33。イサクも 26:25 で主の御名をよび求めました。そして新約ではローマ 10:13「ユダヤ人とギリシア人の区別はありません。…」に。パウロのことば。民族を超えて「主の御名を呼び」人は広がり、私たちもその子孫です。セツの家族のそれからは、神の恵みによって、主の名を呼びことを始めたと言えるでしょう。

終わりに

今日、私たちが発見したのは、不安、苦しみの多い人間の現実につきあい、そこに注がれた神の大きな恵みでした。パウロはそれを「人知をはるかに超えたキリストの愛」(エ 3:19)と言い、私たちがその広さ、長さ、深さ、高さを理解することができると祈りました。具体的には、今日の開会聖句マタイ 18:21～22 節「…『主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何回許すべきでしょうか七回でしょうか。』…」ではないでしょうか。それは無限の赦しです。私たちは、あの傲慢なレメクほどではなくても、それに近い性質を持っています。イエスを見ていたペテロは大きく譲って、七回の赦しを提案したのですが、イエスの答えはそれをはるかに超えていました。私たちはそんな恵みによって救われ、神と共に生きるようにと召されています。私たちの役割は、その神の恵みを日々体験し、その幸い—良き知らせを伝えていくことだと思います。